

〔古事記〕<sup>上</sup>故天若日子之妻下照比賣之哭聲與風響到天於是在天天若日子之父天津國玉神及其妻子聞而降來哭悲乃於其處作喪屋而略○於是阿遲志貴高日子根神大怒曰我者愛友故弔來耳何吾比穢死人云而拔所御佩之十掬劔切伏其喪屋以足蹶離遣此者在美濃國藍見河之河上喪山之者也

〔古事記傳 十三〕喪山もさだかならず或人の説に、藍見川は不破郡府中村の藍川是なり、喪山は

其藍川の上に送葬山と云ある是なりと云り、なほよく國人に尋ぬべし、松下氏が今の僧都山なりと云るはいかゞ、但かの送葬山と僧都山と音近ければ、一の山にや、又萬葉九に、母山に、霞江な引云々とあるは、八雲御抄に美濃とあるに付て、此喪山にやあらむと契沖云り、此歌は、近江湖にて舟より見放てよめるなれば、美濃は隣國なれど、なほ物遠く聞ゆ、又美濃國或人云、武義郡大矢田村に、天王山と云あり、これ喪山なりと云り、又飛驒國に荒城郡、荒城郷、荒城神社あり、上代には同國なりしが、後に隣國に、はなれるたぐひ多かれば、是らにも心をつくべし、又信濃の岐蘇のあたりも、古は美濃國なりしかば、彼あたりにも尋ぬべし、

〔書言字考節用集 一〕<sup>乾一</sup>位山クワンザン飛州大野郡天智帝朝造江州大津宮當山多出良材故名矣、

〔信濃地名考 中編〕<sup>六帖</sup>位山クワンザン八雲抄、飛驒或は信濃かと云、

衣手の色まさりけり信濃なるくらゐのやまは君がまに

よみ人しらす

〔閑田耕筆〕位山は、なべての名所集飛驒と記せるを、六帖に、衣手のいろまさりつ、信濃なる位の山は君がまに、といふうたあり、契沖あざりの吐懷篇に、此歌によれば、飛驒にあらざること明けし、もしは伊勢物がたりの、かふちの國いこまを見ればといへるも、伊駒は大和勿論なれども、西の方は河内にもか、れば、かうかけるやうに、信濃ながら飛驒にもわたるにや、さりとも大かたにつかば、猶信濃とぞ申べきと判せらる、然るに此ころ飛驒高山加藤氏の書音に、位山當國大野郡宮村にありて、東信濃境まで十二里、南美濃境まで十七里、西美濃境郡上越前加賀境迄各十二里計、北越中境まで十四里にして、國の中央にある山なり、あるひは信濃とも美濃とも記せる書あるはいかにやといへり、美濃といへる書は、予いまだ見ず、何を證に出せるにや、凡古今